

ローマ8章14節 「子にさせていただくこと」

1A 父に愛されている子 15

2A 神の相続人 17

1B キリストとの共同相続人 17

2B 被造物の解放 21

3B からだの贖い 23

4B 御霊の助け 26

3A キリストを長子とする家族 29

本文

ローマ人への手紙 8 章を開いてください。私たちの聖書通読は、先週、8 章 1-13 節まででありました。今日、午後に 14 節から 30 節までを一節ずつ見ていきたいと思います。今朝は、14 節を読みます。「14 **神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。**」今朝は、「神の子ども」であることって何？について学びます。

世間一般では、「神の子ども」と言えば、人類すべてのことを意味するのではないのでしょうか？フィリピンのスラム街に住んでいる子どもをうつしたポスターがあって、彼らが神の子供というような表現を読んだことがあります。それは、どの子も神に愛されている大切な子供、という意味合いでそういった表現を使ったのでしょう。けれども、聖書的には厳密には違います。聖書では、一人ひとりがとても大切な存在であることは、神のかたちに造られているから、ということですが、そのまま神の子どもということではありません。聖書で神の子どもと言われているのは、明確に、「イエスの名を信じた者」です。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」イエスを受け入れた人、その名を信じた人が、神によって生まれます。肉としてはもちろん生まれていますが、御霊によって新たに、霊が生まれます。それによって、神の子どもとなるのです。

パウロは、14 節から 29 節にかけて、御霊に導かれた者が神の子どもであるということが、何であるかをずっと語っていきます。

1A 父に愛されている子 15

一つは、その言葉自体に響きがあります、「父に愛されている」ということです。15 節を見てください。「あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」ここの「アバ」というのが、親しみ

のこもった呼び名です。「お父ちゃん」と言っているか、「パパ」と言っていると言われます。この言葉はアラム語と言われていますが、ヘブル語も呼び名は同じです。私がイスラエルに旅行してホテルにいる時に、ロビーなどで小さな子が、お父さんに向かって「アバ」と言っているのを何度となく聞きました。

ここ 15 節には、二つの対比があります。「**奴隷の霊**」と「**子とする御霊**」です。子とする、というのは、養子縁組に入るということです。父なる神と子キリストがおられて、その関係の中に自分も入るということです。神の家族の中に養子として入ります。これまでは、奴隷として売られていて、そこでは恐怖しかありませんでした。けれども、今は愛する父に抱かれて、アバと呼ぶことができる、けれども敬意は忘れず、「父」とも呼ぶ関係の中に入ったのです。

私たちの社会にとっても悲しい出来事がありますね。父子の関係において、父から虐待を受けておびえてしまっている子が数えきれないほどいます。そこには、奴隷関係と似たような関係になってしまっているわけです。奴隷は、何かをしでかすと鞭うたれるという恐れによって突き動かされています。ローマ人への手紙で、私たちは以前「**罪の奴隷**」であると言われていました(6:20)。罪を犯さざるを得ません、罪の対価は死です。死んで、死後に裁きがあるともあります。罪と死の支配の陰があり、そこには恐怖があるのです。しかし、キリストはその死の恐怖から解放してくださったのです。「ヘブル 2:14-15 **そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、15 死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。**」

しばしば、日本社会は、「**恐れ**」で成り立っているとされています。自分がこの社会から村八分にされたらどうしようか？という恐れがあるというのです。日本に限らず人間には、「**見捨てられたらどうしようか**」という恐れがあります。それが、神に信頼するのをやめさせる力にもなっていることでしょう。この方に信頼すれば、周囲の人々から異質な存在に見られる惧れがあります。それで、信じたいと思っても、信頼し、決断することを控えてしまうのです。

しかし、私たちが神の子どもになったというのは、恐れから解放されています。アバと呼ぶことのできるような、父なる神の愛を受けているからです。「**1ヨハ 4:18 愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。**」前回は、イエス様が私たちと同じ肉体の姿を取って下さり、肉において処罰を受けてくださったとありました。罰を受ける恐れは取り除かれたのです。神の全き愛があります。

イエス様が、弟子たちについて父なる神に感謝しておられる祈りがあります。弟子たちを遣わして、彼らが喜びをもって戻ってきたのですが、「**ルカ 10:21 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によつ**

て喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。」私たちの神は、私たちが幼子のような者たちとして喜ばれておられるのです。なので、アバ、父よと叫ぶ御霊をくださっているのです。

2A 神の相続人 17

神の子どもというのは、このように愛する父に受け入れられ、親しい関係に入ったということだけではありません。17 節を見てください。「子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」ここについて、私たちはあまり考えないでしょう。父からのものを受け継ぐとは、裕福な家庭でないかぎり、父の死期が近づいた時に自分が相続する後継者であると、考え始めるのが普通ではないでしょうか？

けれども、相続というのはそういっただけではありません。現代社会は個人主義になっているので、家のものを受け継ぐ、自分が家の運命共同体なのだという意識が薄くなっています。けれども、聖書には、父の名を受け継ぐということが、それが大きな精神的な財産であるかを知らされます。神がモーセに対して、「わたしはあなたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」と宣言し、ご自分を明かされました(出エ 3:6)。それは、モーセを始めとするイスラエル人が、アブラハム、イサク、ヤコブの家の者たちであり、彼らの名を受け継ぐ者たちであり、彼らに約束された祝福を受け継ぐ者たちなのだ、ということなのです。

では、私たちは誰の相続人になっているか？という、「神の相続人」なのです。これは、驚くことなのです。神を父としているということは、神の名が自分に付けられています。天のエルサレムでは、神のしもべたちの額には、「神の御名が記されている」とあります(黙示 22:4)。そして、「彼らは世々限りなく王として治める。(5 節)」とあります。神の名を受け継ぎ、神のものを受け継いで、神が万物を支配されているように、神とキリストを信じる者たちも、王として治めることになるのです。

そもそも、アダムが神によって造られた時のことを思い出してください。人とは何か？それは、神が天と地を創造された時に、あらゆるものをお創りになられて、その後、「創 1:26 さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配することにしよう。」世界を神が造られて、支配しておられますが、ご自分に似せて造られて、それでこれらを支配するように造られたのです。神に支配されて、この方のご性質、正義と公正、また知恵が与えられて、それで被造物を支配、というか、神に任せられているので、管理するといったほうがよいでしょう。

自分がこれほどまでに、大切に見られていることをぜひ知ってください！世においては、自分は

機械のねじのように、否応がなしに見られています。けれども、自分に与えられている仕事、責任、任せられているものは、神の似姿にかなったことであり、将来、神の国で神のものを相続する時の、予行練習とも言えるでしょう。詩篇に、これだけ神に目を留められていることに圧倒されている著者の言葉があります。「8:3-8 あなたの指のわざであるあなたの天あなたが整えられた月や星を見るに 4 人とは何ものなのでしょう。あなたが心に留められるとは。人の子とはいったい何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは。5 あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるものとしこれに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました。6 あなたの御手のわざを人に治めさせ万物を彼の足の下に置かれました。7 羊も牛もすべてまた野の獣も 8 空の鳥海の魚海路を通うものも。」

1B キリストとの共同相続人 17

けれども、アダムから造られた女エバが、蛇の惑わしを受けました。神のように賢くなれるとして、善悪の知識の木から実を取って食べたのです。幼き子がお父さんにすべてを任せているように、善悪の判断を神に任せて、神の言われることに従って初めて治めることができるのに、自分が神のようになるとして、それが罪の元だったのです。このアダムの罪から、罪が全人類に広がり、死も全人類に広まってしまいました。

けれども、私たちはローマ 5 章でしっかり学びました。アダムにより罪と死が広がってしまって、罪と死が支配してしまったけれども、同じように、いやそれ以上に、キリストにより義といのちが支配しているとパウロは論じたのです。キリストが云わば、「第二のアダム」となってください、この方において、アダムの時に損なわれてしまった、神の似姿を取り戻せます。キリストが十字架に至るまでの苦しみを通してくださったことにより、罪と死の縄目にいる私たちを解放し、そして、神の似姿に、神の栄光に導くように導いてくださったのです。

ですから、ここで「キリストとともに共同相続人なのです」とパウロは言っているのです。共同相続人とは、分け前が同じものを受け取る相続人ということです。神がキリストに相続しておられるのは、この世界です。「詩 2:7-8 私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。8 わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。』したがって、キリストにおいて、私たちもこの世界を受け継ぐということになります。かつてアダムが神の似姿として、被造物を支配していたように、キリストにおいて被造物を支配するようになるのだということです。

人は自然に行くと、とても癒やされる思いがしますが、信仰者にとってはことさらにそうです。そこにある自然は自分とは無関係なものではなく、まさに父なる神の造られたもの、キリストに任されているものなのです。いつもお話しする証しですが、明治時代の伝道者で、木村清松(せいまつ)という人がいました。彼がナイアガラの滝に案内されて、アメリカ人から「こんな大きな滝は日本にはないでしょう。」と言われたのに対して、「ナイアガラの滝は、俺のおとっさんが創ったのだ。」と語

ってしまいました。これが地方紙に乗り、「この日本人はナイアガラの持ち主である」との誇大に書かれたそうです。それで有名になって、アメリカの各地で、「ナイアガラの持ち主の息子」という講演会を各地で行ったということです！

そして私たちは、世界の人々、いや身近な人々を見て、自分の好みや考えとは異なる人々を見ても、無関係だと見ることはできないのです。この人たちも自分の父なる神によって造られていて、この人たちも神が愛されて、キリストのいのちを与えられたのだと見るのです。決して無関心ではいられない、私のお父さんのものとして、関わりがあるものとして見ていきます。

2B 被造物の解放 21

そこでパウロは、被造物が解放の時を待っているという話をします。21節です、「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」被造物は、神の栄光を表しているけれども、それでも、完全な姿とは程遠いです。天災があり、また文字通りの弱肉強食が動物の中では繰り広げられています。これらはすべて、アダムの子のゆえです。「創 3:17 あなたが妻の聲に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。」そのため、被造物も初めの姿から損なわれて、その中でうめいていて、解放を待っているのです。

私は、コロナ禍になって、かえって被造物がいかにうめいているかを見た気持ちがしました。人々の動きが少なくなったことによって、市街地の真ん中を、森やジャングルにしかないような動物が堂々と歩いている姿、空気が汚染されているところが、真っ青な空に変わっている姿、木も花も、何か押さえつけられているところから、解放されている、主に向かって歌っている！と思ったのです。聖書によれば、キリストが地上に再び戻る時に、このような被造物が、解放が完成されることを教えています。イザヤの預言に数多く、被造物が解放されている姿が描かれています。(イザヤ 11:6-9 など)弱肉強食はなくなり、人々から病がなくなり、太陽は七倍も輝き、荒野には川が流れ、花や咲き乱れます。

そしてここで興味深いのは、「神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」とあることです。キリストが地上に戻って来られる時に、神の子どもたちも現れるのです。キリストを信じる者たちも、キリストと共に戻ってくるのです。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」罪と死の束縛から解放されている、神の子どもたちが現れると、被造物もその栄光の自由にあずかることができるということです。

もし、興味があれば、CS ルイスの「ナルニア王国物語」を読んでみてください。いや、映画もあります。「ナルニア国物語、ライオンと魔女」を見てみてください。そこに四人の主人公が、ナルニア国の王座に、ライオンであるアスランによって着座します。被造物は、長い冬の季節から解放され、

花が咲き乱れる春となっていて、喜んでいます。そのナルニア国をアダムの子孫である人間が、ライオンであるキリストによって治めるという話です。

3B からだの贖い 23

キリストを信じている者は、このように神の子どもです。けれども、被造物が束縛の中でうめいているように、実は、神の子どもにあるような栄光の自由をまだ手にしていません。それは、まだこのからだそのものが、贖われていないからです。このからだは、まだアダムから受け継いだ、罪の性質を宿すからだなのです。けれども、キリストが天から教会のために戻って来られる時に、一瞬にして、栄光の姿に変えられます。23節でパウロはこう言っています。「それだけでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだ贖われることを待ち望みながら、心の中でうめいています。」御霊によって新しく生まれ、神のものとされたけれども、このからだ贖われて、初めてその贖いが完成します。救いが完成します。いや、救いはもう完成されているのですが、その実現がまだ将来を待っているのです。

4B 御霊の助け 26

したがって、私たちはこの地上にいる間、御霊の助けによって生きていきます。この死ぬべきからだを持っているけれども、けれども御霊に従うことによって、肉の行いを殺すことができると、前回学びました。

そして、パウロは8章で、この地上にいる間に、うめくようなことがどんどん出て来ることを話しています。栄光とは裏腹の、苦しみにあって、不条理なことにあっていきます。そこで、神よ、なぜこのようなことを許されるのですかと叫びたくなります。あることについて、神のみこころが分からなくなることがあるのです。そこで、神は、そうしたうめきにおいても、御霊によって助けてくださることを26節でパウロが教えているのです。「同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださいのです。」どうやって祈ったらよいか分からない時に、うめく祈りをします。言葉にならない祈りをします。しかし、それさえも御霊が助けて下さり、みこころにそった執り成しにしてくださっているということです。

3A キリストを長子とする家族 29

このようにして、神の子どもというのは、父なる神を持ち、愛されながら生きることができていること。そして、神の相続を、キリストにあって行うことを見ました。次に、子としていただくことは、神の家族に入ることができたことを意味しています。29節を見てください、「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」

神は、ご自分の子どもに私たちをしてくださっていますが、最終目標は御子と同じ姿になることです。ご自分の独り子のような、栄光ある姿になることです。それが正真正銘の神の子どもということです。そして、次に、そうすることによって、「多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」とあります。

これは驚くべきことです。神ご自身である御子が私たちの兄弟となってくださり、自らは長子、あるいは長男となってくださり、父なる神の家の中に招き入れておられるということです。イエス様はよみがえられて、マグダラのマリアに会った時に、彼女にこう言われました。「ヨハ 20:17b わたしの兄弟たちのところに行って、『わたしは、わたしの父であり、あなたがたの父である方、わたしの神であり、あなたがたの神である方のもとに上る』と伝えなさい。」主であるイエス様が、弟子たちを「兄弟」と呼ばれています！そして、「わたしたちの父であり、あなたがたの父」そして、「わたしの神であり、あなたがたの神」としておられるのです。イエス様は御子であるにもかかわらず、弟子たちと同じように兄弟になったださり、弟子たちが、父なる神とご自身の父と子の関係の中に招き入れておられるのです！

イエス様は捕らえられる直前に、こう祈られました。「ヨハ 17:22-23 またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23 わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」父と子がひとつであるように、父と子の中に彼らも一つになるようにすると言われています。父なる神を自分たちの父とするように、イエス様が兄弟になったださっているのです。私たちにとってイエス様は、主であります。神であります。けれども、この方にあって、私たちが神の子どもとしての回復が与えられています。この方にあって、神の家族の中に入り、一つにさせていただき、それが完成するのは、私たちがキリストの似姿に変えられる時なのです。

私たちが知るイエス様は、私たちが信じ、礼拝する対象であります。同時に先駆者というか、目標でもあるのです。イエス様が父なる神と持つておられる関係が、私たちの関係にもなるのだということなのです。これほどのことが起こります。神の子どもというのは、これほどの恵みなのです。元々、そのように造られていたのですが、罪によってあまりにもかけ離れてしまった。けれども、そこに戻るのです。その旅路の中に私たちがいます。そしてキリストが満ちておられる教会にいます。